

■政治経済学(Political Economics)とは?

本書は政治経済学 (political economics) の中級テキストとしてPersson and Tabelliniの*Political Economics: Explaining Economic Policy* (2000)と共によく読まれてきた本である。この「政治経済学」という言葉の起源は、アダム・スミスが活躍した18世紀までさかのぼる。経済学は最初、政治経済学 (Political Economy) と呼ばれ、現在の経済学 (Economics) と同じ意味で使われていた。政治経済学の起源とその歴史については、本書1.5節にも書かれているので、興味のある読者は参照されたい。

現在、「政治経済学」と呼ばれている研究領域には、様々な学術的アプローチがある。本書の政治経済学の取り扱いは、近代経済学の数理モデルを用いたアプローチから様々な政治的な事象を分析しようとするものである。さらには投票データなどの整備、計量分析の深化によって、理論的なモデルの実証分析も盛んに行われており、「新しい政治経済学」は今一番ホットな研究領域の一つである。 —(「訳者あとがき」より)

平素は格別のご高配を賜り、厚くお礼申し上げます。
このたび、ティモシー・ベズリー教授による『良い政府の政治経済学』(Principled Agents?: The Political Economy of Good Government) の訳書を上梓しました。
ぜひゼミナールのテキスト、授業の副読本としてのご検討を賜ることができたら、まことに幸甚に存じます。

2025年1月吉日 編集担当：永田透

書籍詳細はこちら
<https://www.keio-up.co.jp/np/isbn/9784766429732/>



見本のご請求を承っております。採用をご検討いただけただけの場合は、こちらのフォームよりご請求下さい。
<https://business.form-mailer.jp/fms/8e4a3f4c186669>

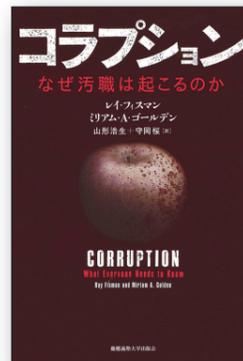


【関連書のご案内】

コラプション —なぜ汚職は起こるのか

レイ・フィスマン、ミリアム・A ゴールデン著/山形浩生・守岡桜訳/溝口哲郎 解説
四六判上製386頁 ISBN: 978-4-7664-2626-7 Cコード: C0030 定価 2,970円

世界の大部分の国が腐敗・汚職に悩んでいる。しかし、汚職を撲滅した国も存在する。汚職は、個人の「悪」の問題ではなく、構造の問題であり、法律だけではもちろん止められない。また民主主義でも無くせない。「汚職の均衡」をいかにして転換するか? 「悪」を糾弾するのではなく、その仕組みを理解することが汚職撲滅のカギとなる。



慶應義塾大学出版会 <https://www.keio-up.co.jp/>

〒108-8346 東京都港区三田 2-19-30 TEL 03-3451-3584 / FAX 03-3451-3122

「政治経済学」の教科書をお探しの 教員のみなさまへのご案内



良い政府の 政治経済学

Principled Agents?

The Political Economy of Good Government

ティモシー・ベズリー

溝口哲郎 訳 下松真之 解説

A5 判並製 / 330 頁 ISBN : 978-4-7664-2973-2
2024 年 10 月刊行 定価 4,400 円 (本体 4,000 円)

Political Economicsの分野を代表する
Timothy Besleyによる画期的なテキスト。
政府と政治家をめぐる重要問題を経済理論で解明する。

経済学においては、有能で善意の「政府」が前提になっているが、実際の政府（政治家）は失敗や腐敗の可能性が存在する。有権者の望みを実現する政府をどのように実現するか、民主的な政策を実行させるにはどうすればよいか。その構造を政治的エージェンシー・モデルを用いて分析する。2024年度ノーベル経済学賞のテーマにも関連する「政治経済学」の中級テキスト。

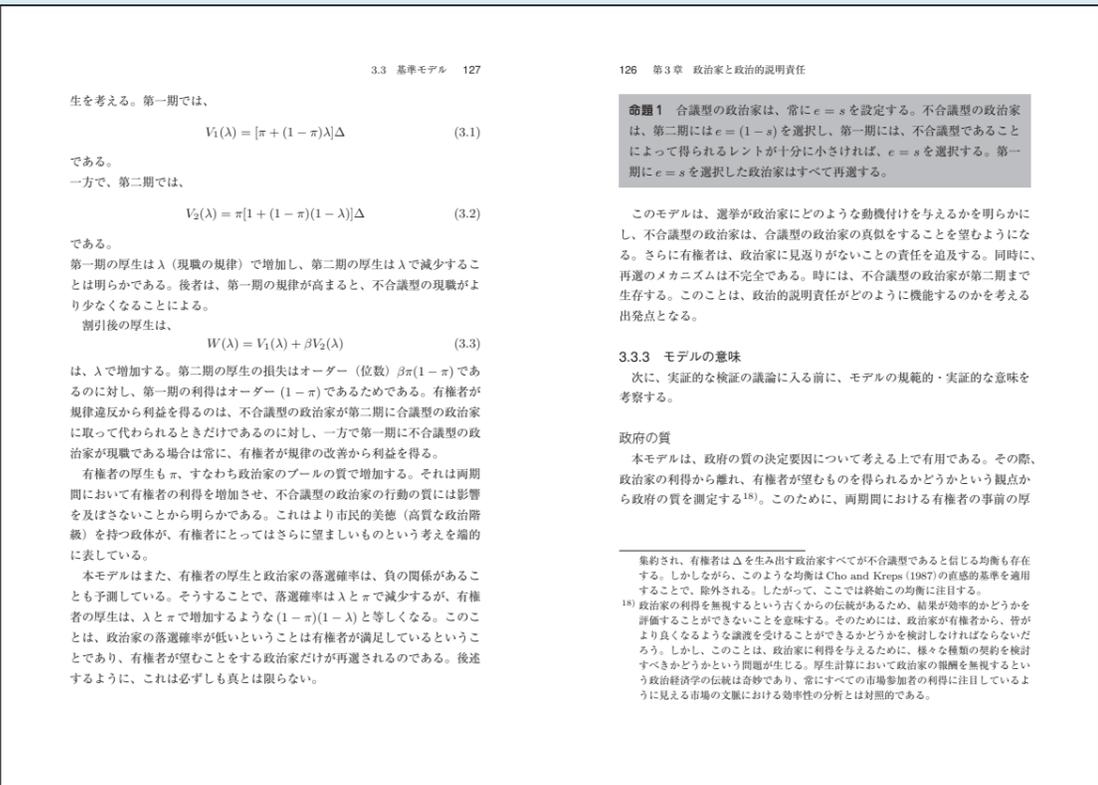


慶應義塾大学出版会

『良い政府の政治経済学』のテーマは、現在進行中の議論に関連していることは間違いない。ドナルド・トランプの当選と復帰の見通しは、この本に書かれている多くの問題を浮き彫りにしている。日本では、日本史上最も変革的な指導者の一人と概ねみなされている故・安倍晋三氏の評価と実績が、「政治家選択」について多くの議論と論争を生み出し続けている。特定の政治指導者についてどのような意見を持つにせよ、活力ある民主主義国家に住む私たちは、市民が政治に参加しようとするからこそ、政治制度の価値を高めることができるのだということを、時に思い起こす必要があるかもしれない。このことは、公益に貢献する効果的な政策を実施するための最良の希望であると同時に、そのような政策の実行者として誠実な人物が選ばれるのを促進する。本書は、政府が公共の利益に奉仕するためには、理想主義と実用主義の賢明な組み合わせが必要であることを思い出させてくれる。

——「日本語版への序文」より

【目次】	
日本語版への序文 序文	
第1章 理想的な政府に関する争点	第4章 政治的エージェンシーと財政問題 (マイケル・スマートとの共著)
1.1 政府についての二つの見解	4.1 はじめに
1.2 本書の概要	4.2 モデル
1.3 背景にあるテーマ	4.3 政治家のタイプに関する三つのシナリオ
1.4 経済政策の基礎原理	4.4 公共支出と選挙効果
1.5 政治経済学の歴史	4.5 政府を抑制する
1.6 政治におけるインセンティブと選択の重要性	4.6 債務と赤字
1.7 結び	4.7 政府対非政府組織 (NGO)
	4.8 政治家の能力
第2章 政府の失敗を解剖する	4.9 結び
2.1 はじめに	第4章の補遺：純粋なモラル・ハザードを伴う最適財政政策
2.2 政府の失敗の三つの概念	
2.3 公共プロジェクトへの資金調達の場合	第5章 結論と今後の研究課題
2.4 「政府の失敗」の原因	『良い政府の政治経済学』解説(下松真之)
2.5 「政治の失敗」の原因	1 はじめに
2.6 時間を考慮に入れたモデル	2 政治的エージェンシー・モデル
2.7 政府の失敗に対処するには	3 「政府の失敗」
2.8 結び	4 Timの研究業績
	5 Timとの共同研究
第3章 政治家と政治的説明責任	6 結び
3.1 はじめに	
3.2 政治的エージェンシー・モデルの構成要素	訳者あとがき
3.3 基準モデル	参考文献
3.4 諸問題への様々な拡張	
3.5 民主制システムを機能させるには	
3.6 結び	



※情報の経済学などの、予備知識を持つ経済学部、政治学科専門課程の学生を対象としています。

【著・訳者】

ティモシー・ベズリー (Timothy Besley) [著]

ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス (LSE) 教授 (経済学・政治学)、及び、W・アーサー・ルイス開発経済学教授。オックスフォード大学卒業後、同大学にてDPhil (Economics) 取得。2018年にSirの称号を授与される。専門は、開発経済学、政治経済学、公共経済学など幅広い分野にわたっている。アメリカン・エコノミック・レビューなどのトップジャーナルに論文多数。本書以外の著作に、*Pillars of Prosperity: The Political Economics of Development Clusters*, Princeton University Press, 2011 (Torsten Persson との共著) がある。

溝口哲郎 (みぞぐち・てつろう) [訳]

高崎経済大学経済学部教授。慶應義塾大学経済学部卒。オタワ大学でPh.D. (Economics) 取得。専門は、公共経済学および応用マイクロ経済学、腐敗の経済分析。著書に『国家統治の質に関する経済分析』(三菱経済研究所) がある。

下松真之 (くだまつ・まさゆき) [解説]

東京大学教養学部卒。ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス (LSE) でPh.D. (Economics) を取得。LSEの博士課程 (経済学専攻) に在籍中、本書のリサーチ・アシスタント (RA) をつとめ、内容のチェック、文章の修正、図表の作成などを行う。本解説では、この本の理論的な貢献部分である「政治的エージェンシーモデル」の定式化 (第3章) の評価、そして一般読者にも有益な「政治の失敗」の説明 (第2章) をわかりやすく解説。また著者のBeskey教授の人となりを紹介。ストックホルム大学国際経済研究所 (IIES) や大阪大学大学院国際公共政策研究科 (OSIPP) で教鞭をとる。さらにBesley との共著論文“Health and Democracy.” *American Economic Review* 96(2)2006: 313–18.を執筆する。

弊社noteで、解説の一部をお読み頂けます。
ぜひご参照下さい。
<https://note.com/keioup/n/n69b95ad05869>

